双塔

カトリック新潟教会

2020 年 1 月
№ 380

すべて神のなさることは、良きことなり!

主任司祭　ラウール・バラデス

あけましておめでとうございます。

2020 年はどんな年になるでしょうか。期待と不安を同時に感じます。すべてにおいて神の働きを見て、希望と恵みに満ちた年となり、そのように受け止めるためにこの物語が役に立つと望んでいます。

ロバとニワトリとローソク

あるとき、ラビ・アキバ[1]が、ロバとニワトリとローソクを持って遠い旅に出た。

なぜ、ロバを連れていったのか？ 荷物を運び、疲れたときにその背に乗るためだった。

なぜ、ニワトリを連れていったのか？ 朝早く、コケコッコーの鳴き声で目覚めるためだった。

それではなぜ、ローソクを持っていったのか？ 夜、ローソクの明かりのもとでトーラー[2]を学ぶためだった。ラビ・アキバは祈りを終えると、旅に出た。

長い道中を、ラビ・アキバは歩きつづけた。日が落ちて暗くなる頃、とある町に着いた。ラビは休もうと思ったが、その町には宿がなかった。ラビは町に住む人たちに一夜の宿をたのんだ。だが、「寝る場所なんかない」と、町の人々はラビを追い払った。誰もラビを家に入れてはくれなかった。

ラビ・アキバは、暗い、寒い道に立ちつくした。「すべて神のなさることは、良きことなり!」と、それでもラビは言った。

ラビは、客を招きいれようともしない人たちの町で一夜を過ごすつもりはなくなって、野に出ていった。そして、一本の木の下でローソク灯した。ロバとニワトリに餌をやって、ラビはトーラーを学んだ。夜、たったひとりで野にいることも忘れて、ラビはトーラーに没頭した。

突然、ものすごいうなり声がきこえた。近くの森からライオンが飛び出してきて、ロバにおそいかかった。おどろきあわてているうちに、今度は猫が来て、ニワトリに噛みついた。ラビがニワトリを助け出そうとする間もなく、強い風が吹いて、ローソクの火が消えた。ラビ・アキバは、真っ暗やみにただ立ちつくしていた。ロバもいなくなったし、ニワトリも、そしてローソクの明かりもなくなってしまった。それでも、ラビ・アキバは言った。「すべて神のなさることは、良きことなり!」

町の方角から叫び声や怒鳴り声がきこえてきた。混乱し、あわてた、騒々しいもの音がつづいた。 いったい、町で何があったのか？

敵が町にやって来て、町の人をひとり残らず捕虜として連れさったのだった。敵兵は途中、ラビ・アキバが立っていた野を通りすぎたが、ラビの姿は暗やみにまぎれて見えず、ラビは命拾いをした。

――さあ、これでみんなは、神のなさることはすべて良いことだと分かるだろう。ライオンに食われていなければ、ロバが鳴き声をあげただろうし、猫に食われていなければ、ニワトリが声をあげただろう。風にローソクの明かりが吹き消されなければ、暗やみに明かりが見えて、兵隊たちはわたしに気がついて、わたしも捕虜に連れていかれただろう。 ラビ・アキバは命を救ってくださった神に感謝して、また旅をつづけた。

「ユダヤ賢者の教え①」より

[1]ラビ・アキバ：(50 年－135 年頃)紀元 1 世紀末から 2 世紀にかけて活躍したユダヤ教最高の律法学者の一人

[2]トーラー：旧約聖書の最初の 5 書